



中村俊定文庫

文庫 18

580





櫻  
色  
弱  
仙

東江書  
畫







遠より遠にと花のふさふさ  
 白くしるしの雪かきぬ春の日  
 千種愛若初布もさしと昔ついで  
 中戸の信子ゆかりきまじり  
 浮沈く雨ふちり星々おぼの月  
 懐の結あき 禊のちりり



行美子  
 存義





うゝ葉の後口ふゞて秋の暮  
何ぞよこころとていふとさうぢく  
はゝあゝり庫裏の暮もせゝとて  
こゝろゝゝお 喜ハ風呂あぢ  
一うぬよ日の暮てまゝ夕ゝとれ  
駕籠のおやまお 顔の夕ゝとれ  
と海くよまわらる人よあゝ悪  
屏風ねんよ 筆ゝ 照 光

梅枝縁掃除お下タヤゝま  
波唇まひるに卵トハと返く  
辺舟のゆちもあり向く擁 舟  
篠るまゝとも 筆ゝ またゝ返  
繭玉小燈棹棹子とさゝとて  
ゆゝゝと見えは 嫁も仕合  
算盤が陰をつゝせと 通ゝとて  
とやゝおとまは 孫らゝとて



生茂る竹の中かゝる 羊一老唐  
字遠い一やとて人も改りす  
夏の夜おぼるも知して酒酌にて  
うしろの山々 入海る海  
信濃なる 田毎お船小舟の風  
おしる尾切りと 沙汰の夜露神  
松子くはあゝ 雲子のさやと出ぬ  
軒子垂つるり舟一 津子新

やうききく 燈くく 記言おおや  
又も始り 玉 通い 素お  
立くく 登 蓮くく 待こくま  
組付て たく 帯 素乃 膳 椀  
梳 笠 ち きの 小 船 舟 花 の 陰  
けく 杖 つ ぬく 長 閑 けり けり



行年七十二  
獨出庵買明

逝くは垣たさくとも嘆かぬ  
春中 空をりね 春 春 山 畑  
公事荒も治まれば法代は旅をきて  
低いさくとも 玉のりいま  
矢の糸結月の光りきつく糸に  
その程くよきるくは 啼

く川汐の本履とぬす演屋敷  
口て互いよ 福ふ 朔日  
憂めくして泣き起来し尾を居  
判る字のうらまえてハ 世 付  
字文ハよおくより世よらん  
月結ほり敷のく川とりと飛  
涼風の中少後き 築田結橋  
ほろりくと 落く世 雨



別荘に女小しとて書を所へし  
此の女子病むとも字なりり  
此のうつげハ花も骨折ら  
ぬきりり子筋る物く  
川人のこたむ中の傀儡  
耳さしとて 糸物なる  
何なる陸のちとく門口  
二枚襖に二字ある 弊は

正成子箒のこたむと事と  
水小きゆ 谷に 雲  
厄の天地に眉下り  
死すておととて  
在るはつや河を子  
使ハ庭へ 酒を  
終はるる時雨の  
とより代に 飯を 森所



此河を田地ハ川へ分けて  
是故河川ハ多額 古寺跡極  
小かくて河堤及事ハ心重  
越付も移るも其れ如東所  
々々も又其れ等々なる花  
青子如云々不蝶く乃乃

行年六十四

樽川

かゝる月海にて見ん様う  
山路の徑 三れ 念法  
周車と如る子 紙籬のまじり  
遠くても猫の眼 赤ん  
照くく暑さ如 晝日の  
著る舟の泥 吸はく



入部とて 追手櫓の 大般若  
を板壁し 清浄の小春  
其くく又 隆法と 經ての書  
馬ふま 姑も 炭うり 若指  
木子竹を 結くと 興や 縁心ま  
河ふて かい 記 東アの さり 爰  
舟出く さくもの 笛れ 垣根ふ  
梅の 生 弱き 陰と 感付

草子 興ろく 草子 若 姑 法 文 露  
華の 部 の ぐ 成 遠 評  
厚く 濃く 草子 若 姑 法 文 露  
庭の 井 柳を 結く 系申ふ  
持葉の 掃さく 志く 日南やこ  
若 授乃 比 工 尼 袖 引 ぶ  
綱と 備る 慈れ 草子 若 姑 法 文 露  
小春の 廿日 又 牡丹 さく



いの字より棟敷はく破勢を  
そ達の入世 富士山 忍辱橋  
さう志満よ扇をたふ 駕を耀  
古用は西の河とてさうけちを  
菟標は川ちり 如き新の松  
案を名はる戸は肉の如く  
戒の昨の月輪説の表とて  
高きは活ふ 童屋さう支

磐石河とて河の家、河の如  
布千つりて風子如く  
新室の本柱は秀祠とて  
恒言な如く 弁原の曲  
汁講は友しりて花さう  
と如くはよの代くの永き日



雞口

とくも海も浅黄さくさく結ぶる山  
新先も日も永江 藤之  
下たくの口かきき春面  
くみくまほり了 烟る 大空  
水涌く并角小川戸軽舟おぼし  
乃こるまくれの於静なり

柔結實を折めて忍ぶる 枝竹の  
七の冥加結 くまり 語地  
いつの宵も曇りて子起四ツ下り  
冬至結梅の風了ほろく  
親まれのわづれ人の身乃皆たかく  
まらんが方足高 侍よまじり  
小泊瀬も伏屋も同じ月あま布  
間を並てハ 心組と唱 麻



うき室始小面始んを降  
阿らりの人下風呂を振出  
癡寺を指てゆも花ゆへ  
摘まて産ぬる 葉の世居る  
夏近く水乞香の匂も  
秋いともやそり 登もよく席る  
又附の阿ると斗乃 負軍  
此 象 守 始 ぶ 治 支 一 門

風の来る露もしくと青苔蒲  
蚊よよこ笛よ明く起て  
わう始るハ訳を記事に伝へ  
眉をかきしそ 見もる 白の匂  
共らうら起ようこ阿ら 振報  
ほらうら起ようこ阿らの月  
うきこれと 近 室 始 小 面 始 ぬ  
巻ていかくす 粘せりき



呵ららばやしくぬを渡く姑妻思て  
ちり起小道らぬく程言提所  
真もゆるりゆりゆり水の細流き  
荷よきりゆり結程きこゆり  
あふ人の聲も初花の咲る里  
里小いゆりゆり春もくゆりゆり

祇聖

雲下や書檮の上結蕨民書札  
滝あたらふく結ある陽巻  
鯨もあゆみゆりあゆみあゆみ  
猿もあゆみゆりあゆみあゆみ  
能禰亦本の習よりゆりあゆみ  
更く程あゆみゆりあゆみあゆみ



古職も皆當年のや、院表煉  
緒を結ひて韻ふ掩記せん  
若木の意も育ていさ記さき  
寛自由り河原もてもと向  
慈悲の心とあとも清き法山めて  
心と何 臺と 夫婦 願禮  
うゝとと志うの庵と志うとて石也  
存と解と毎と一節と何と一息

物言も實結入却り知るゝ事繁  
わあても悟き至結何とれ散  
老の身の手書をいさ記とりの  
蘇入ととつり 落合よりり  
雪解もなつて結結大井川  
新く小岳去 松原  
奇なり結とつり 夷とつる雨と  
こやくなりり 妹の 成り長



芳藤結起りハ雲巾材おけりさ  
所りともしき花葉正し唱  
法の首ハ二尺ハ志ハ月の柳  
椽ハ毎ハのセ花ハしハ  
時分ハ空ハ葉ハ花ハとハ拵ハ  
風ハ除ハをハしハのハ晴天  
神ハ主ハはハ子ハ始ハとハ糸ハ年  
とハ中ハ日ハ頃ハりハ曲ハりハやハ世ハ也

春ハとハ尔ハ雪ハがハ持ハ越ハはハ福ハをハ  
若ハ葉ハはハ心ハ也ハ子ハ又ハしハハハ歴ハこ  
幸ハ便ハ尔ハ花ハのハ情ハもハ言ハ信ハて  
用ハ法ハをハりハるハもハすハりハ城ハ下  
一寸ハとハしハのハ雪ハおハしハるハ廊ハ也  
掃ハ耳ハ掃ハとハしハ花ハ絶ハ也ハり



温克

遠き里近海やうも松楓のれ  
う海玉の樹々 響る松琴  
草笛き時々 画工松 續りて母  
ち好き座交れ宵中 薄縁  
存の影をや 交りてハ蚊の舞を  
めもき草松 花若 ちりり

上市松松と鐘鳴るわらわら  
風呂のはら松ういふみて並  
相いりて起きておんか昔遠い  
ちつちつ松松揚のほつちり  
志つけさよ若草の中松園教寺  
ちりり松松きた只ほのりた  
夜おろし同遠の夜と引うら  
せりり松思ひゆるるちやかく



吹花くくをに法園の落忍く  
朝うく霞む峰月張由  
實花とびくへのふハ笑く  
河ちくくち寿如松藤も寸心  
す何今尔立て反立く 旅用迄  
何可まても訪へおの乳母乃悲  
川下急流千丈板波屋通り  
神乃打志多記 森如冬く

け成をく粟ちくく出苦乃馬  
咄くくく君の 扱足  
色尔如松くく豆如踏山く  
咄くくくのく松ま糸一窓  
まくくも新活流波く山きく  
おゆみくゆりく 松政の樽  
葉くくく空くけり如存兒く  
森くく白鳥ん 笛如 一 笑



校習所風情瓜柿生り東岳  
白をともやうそ 山伏者 行  
母人の阿まや小物瓜 野火  
如きともややくや 瓜江戸(事)  
しあ晴し海をまう人あ花の岩  
日くふ 添生 瓜 網 瓜 只 中

在轉

雨結日や梅もいそて唯ひと  
沖野かちりもきりちり 春  
はらけ此之毒子まてり菓をくらて  
室よ 河ふ 困 層 結 軒 並  
宵の月貞此懐 清みとえし  
是よ 彼もと 瓜 足らぬ 秋



森三太り別下市あり海印やうら  
わひうかると市里や一廐どくく  
萩ハ萩うらむも蒲花かけ気  
と結申う海に恙世海き部  
撞初も令結光や筆くら會  
涌竹の并結袋代めつら記  
帳未てもかう海うきぬる 舟署  
小齋結列年よゆらね お髪

月窓一時春信流おはとわくく  
とーちーと結袋のそこそあ  
案こめく誕生浪花のうらや筆  
暑お日くせもぬくくせうとて  
追風うき春おめき結離荷和  
ゆらと結う廣きこちの店あり  
神酒陶師の川海く八百萬  
面海くきぬ案 以結く



松栞毛に舎人か牛と 浩い上  
去砂 奇響 小脛 三如川  
方角もろんと 遠い 姑家の向  
了月も十夜 月姑も  
鬼の留ち 嫁の栞も ちりぬえ  
うとまうし ちや 塵拂の琴  
旗色もらんりふ ちと 程あは  
く 海まにぬらぬ 水姑 潤い

雷とくわ 顔あき 夏 陸  
赤 ねは 記 ちと 姑 風 干  
下 祢 宜の 志の さま ちと ちと 代り 合  
之 姉く 浩 ちと き ちと 姑 ちと ちと 記  
奥 河り や 若 本 老 樹 姑 花 ちと ちと  
ちと ちと 煙 ちと 草 の ちと ちと



小知

海の橋くさり峰一乃雲  
く水占とけつ紫さる日春  
鏡鑑ふらぬ所小福寸席志め  
海下之 袴や 子長 鞠らん  
黒漬結縮の加減以何とてと  
十三夜うら 船子煙 家な一

雁の声唯 稻の茎も くらげ  
藤束一しやう 坂仙父の行流  
西様の注刺刀りるを 以てて  
東ふ ぶ 二 中 八 日  
印さくとも 年波とく 城際  
今知ハ 馬 尿 妙る  
燈や ちりし ちりし ちりし  
石や ころり ちり 占ふ 並し



をくわく 夜寝神の移り事  
市より 煙く 紙 可 色紙  
身 軽子 道 空も 夏 迫ふ  
永 ま 日 暮 籠り 色  
酒 印 け 勝子 穴の 字 なり  
花 下 丁 女 系 の 振 合  
山 梔子 色 赤 白 咲 てる けり  
暑 父 日 向 姑 牛 の 出 名 粉

此うら子 袖 通 ぬ 衣 も けり  
送 中 事 志 中 一 権 一 じり  
良 の 望 女 方 けり 色 けり  
明 子 凱 波 の 音 けり 色 けり  
偽 の 縁 之 けり 一 又 一 色 けり  
ま けり 色 けり 色 けり 色 けり  
ま けり 色 けり 色 けり 色 けり  
楢 子 袖 けり 色 けり 色 けり



とく<sup>疾</sup>よりと水霧や<sup>ら</sup>ぬ霧降<sup>ら</sup>く  
困憊重よ<sup>り</sup>ゆ<sup>ら</sup>能<sup>く</sup>枯<sup>ら</sup>ぬの  
家古く中<sup>に</sup>古<sup>き</sup>子を<sup>と</sup>祝<sup>ふ</sup>へ  
坂の<sup>車</sup>よも<sup>も</sup>廣<sup>き</sup>親<sup>類</sup>  
津代<sup>に</sup>花<sup>を</sup>跡<sup>に</sup>上<sup>野</sup>冬<sup>の</sup>鼻<sup>の</sup>先  
處<sup>に</sup>也<sup>ら</sup>池<sup>乃</sup>夕<sup>景</sup>

秀國

谷<sup>に</sup>子<sup>を</sup>好<sup>む</sup>せ<sup>り</sup>山<sup>を</sup>九<sup>に</sup>  
鄰<sup>に</sup>踊<sup>る</sup>百<sup>を</sup>尔<sup>は</sup>城<sup>を</sup>と<sup>る</sup>石<sup>を</sup>  
榮<sup>を</sup>為<sup>す</sup>乃<sup>は</sup>讓<sup>り</sup>一<sup>に</sup>詔<sup>を</sup>島<sup>に</sup>行<sup>く</sup>と<sup>る</sup>  
五<sup>を</sup>製<sup>す</sup>乃<sup>は</sup>葉<sup>を</sup>子<sup>を</sup>歌<sup>を</sup>書<sup>く</sup>と<sup>る</sup>山<sup>を</sup>記<sup>す</sup>  
了<sup>す</sup>存<sup>を</sup>の<sup>影</sup>と<sup>る</sup>と<sup>る</sup>黄<sup>を</sup>昏<sup>を</sup>  
い<sup>ふ</sup>道<sup>を</sup>と<sup>る</sup>道<sup>を</sup>と<sup>る</sup>世<sup>を</sup>忠<sup>を</sup>家<sup>を</sup>



舟の跡と若草石中一過しの里  
寄 帰るゝりて空の寄る如く  
写とく一代集尔 西よりそ  
けんやりの戸結魚釣り焦より  
船若ハあさく七門と船 廣け  
別添の栢抄 遠く 衣と赤  
初立月 夢や海のき 授政中  
り 一日 課 未 進 深 人 と

物うけ尔面ラ い〜 ぎ 軽 水 融  
淡き流き〜 小 奥 印〜  
月花のさ〜 花と 思ふ 物〜 の 唐  
獨活の皮 永 家 土 間 の 日 何〜  
次 信〜 年 忌 弘 事 も 矢 の 如 き  
こ 路 里 と 落〜 百 積 の 暮  
滑〜 水 正 心 川 結 丸 本 橋  
葉 倦 いて 見 伸 野 小 堂 政 乃 歌



ついで尋る人老 若狭 山と津  
池田の者へ 如き事 細道  
草鞋や 割たもこや 風くまを  
娘も愛く丘 お貸も 居た  
隠き小 君袖あふく 芥渡  
肉やと 二路ふ若く 尺八  
宵の宵尔 三日月入く 六志周  
吹節も 良 好 ぬり 起 音

葉や丘 埴生 草まきとも 祢直の 許  
祝詞 軽く 野へ 呼り けり  
よれハ 之 魁も 雀ほ くり  
舟の 林 春 ふく 支 日 孤 歌  
淡上 内 笠 若 連 歌も 花の 時  
半 舞 屋 へ 水 風 流 結 春



可因

吹満く風もさびさび揺られ  
都の友とおもひ出た 春  
紫の戸を法衣の中へ敲りし  
おのけし折麦の穂口も小皿と  
更なる月音うら星結ゆら花  
地響地のうら 冷き風

誠哉やうかゆゆく 妹乃山  
年よりうら 先達の家  
面さうら法衣振るひきし  
屏風をかりみわたり 唐干  
水木輝る極うらうら 文庫系  
ちうらうら 教も又 華  
編笠を被り 春の跡 かり  
菘入はきき 嘆はうらうら



小刀の一本は、  
筆の先は、  
馬の脚は、  
角力は、  
新蕎麦は、  
利口は、  
吳井の、  
東河うら、

忽ち、  
旅高は、  
お徳を、  
何て、  
けし、  
倒る、  
照る、  
誰と、



和川 ありて今姑安といひ聲を連ね  
ゆへに生い 石玉あり 姑の聲  
神垣 姑の聲も 姑の聲も  
歩り ありて 歩りて 歩りて  
谷陰 亦 思ひ けり 花 一 束  
かゝい 菓 籠 乃 山 谷 へ きて 坎

常仙

山とや 母 一 樹 畫 姑 さ ら けり  
細 歩 人 小 同 山 一 里 乃 若  
童 姑 破 魔 射 ち ぬ 姑 申 けり  
菜 子 包 子 冬 歩 乃 ち 紅 さ 衣  
四 っ っ 唱 全 九 っ っ 唱 后 姑 存  
津 一 っ 浦 一 っ っ っ っ 於



そり分て今年冬詣の勢始りき  
済く向公事御状お知し  
いふの勢多に昨は始り  
度ふと清うたも母始り  
実しつる親言経御書と始り  
と始りけ御書と始り  
と御書と始り  
自由のより御小田原若所

卯の龍小ゆりーひりー  
おし生も有始り  
花と踏りきりん男  
菽乃りー御書と始り  
州の家子文臺一り  
菽乃りー御書と始り  
餅振るちりー雪始り  
菽乃り馬御門若







金洞

秋の夜は二夜の有る、雲さきら  
霞の楼へ、夕暮の、管絃  
しつくと、蝶も、燕も、羽を、振る  
砂うねり、馬場の、朔陰  
足半、姑蘇、小刺刀、ささり  
笛を、とけ、け、氷こ

習子、湯柳、の、心、の、簾、賣  
糸、結、を、き、都、の、心、の、  
後、流、派、あ、か、り、て、遠、く、と、く  
衣、柳、を、衣、と、立、姿、あ、り  
南、京、の、四、派、歌、貝、を、海、が、り  
風、和、ら、う、に、ま、を、派、と、こ、福、安  
即、ち、新、古、新、の、村、展、望  
空、の、入、園、結、人、の、心、の、序











いふせん母の病のも 長乃秋  
用や里控く 苗書し 出籠  
姉り賣も久ふハ 姉活子 姉をかり  
梢に 暮 姑 下む 加々 風  
澤水の 浅き 方々り 氷る へ  
陰も 一筋 指し かくれ 春  
嫁娘 適し 出し 歩く 春  
その人 姑 魚の 袖き みる 春

印相 姑 みる 春 姑 言く 春  
唐戸 暮る 春 暮 乃 下 春  
朝の月 春 姑 見る 春 姑 春  
稚子 姑 みる 春 犬の 眞 出 春  
春 姑 みる 春 姑 阿<sup>荒</sup> 春 春  
珠 春 春 春 春 春 春 春  
帳 春 春 春 春 春 春 春  
雨の 春 春 春 春 春 春 春



つらゝあゝ縁結ふけさ南烟草  
田中一て乃け船粟は神々系  
紫船と帆のけの船の進め起て  
水と掃出た 奥市吉 跡  
持佛のつら纏へ火とく何と  
をふれ子抱て存加ゆひさす  
秋と煙く髪耳 寂しく控取  
あ涙さくらく黄と心 行祖

二りあふ由車河くつた 初甲何  
常 志あ何くつた ちくくこ  
おとつらつ 由水室中をく風  
降とつらつ 音結 落雲  
燈籠あ孤く 花結木の有るり  
川 音とつらつ 長閑な流以



菊堂

園行りと風の案内やふさふさ  
雲は霞が如く一葉人  
燕は一葉清を如く如く  
椀はははは九つ、唱る  
旅人如くこころごとく 自の  
やーさーさーとて 襟よみ拭

町中へ何事ともなく一葉  
旭さやうさ早一葉の音  
いきなり如く高き如く高き  
川舟の安否も業 移ふ  
毎日のやうな難波の舟さ  
力持して歩きける 砂利  
吉沢の子の如く如く如く  
画馬踏五席如く如く 鼻紙



志しし舟を楫の立し 是れ姑上  
④ 姑 活生 姑 一十と 姑 女 流  
機お海女及 故障子姑 獲 新  
盗人 捕も 意 是れ 是れ  
山と雨の二夜のうら 子 羊 集 色  
お 寺 茶 女 一 吐 海 姑 ち  
は 歩 ぬ 口 並 姑 ち ち 思 乃 ち  
今 度 速 入 海 書 ち 傾 塔

青山と初浪乃 山と笑うる  
夕立 ちれ ち 啼 子 規  
田 樂 波 磯 百 連 ち 答 ち  
自 然 ち 勿 神 ち ち ち 句 當  
谷 ち ち 觀 音 經 ち 意 ち ち  
南 西 ち ち ち ち ち 柳 折  
若 月 照 本 陣 ち 櫃 出 ち  
吹 ち 通 ち ち 跡 ち 姑 柳



語つく神意の袖も切らぬや  
瞬く間に出来り古き  
言ひあふ親子結中も山あり  
羽織の葎紙もく  
朝日  
山ハ花里ハまゝに字もなかりり  
又一一きり 涙のる 其

白頭

山崎早々東西急ぎに揺られ  
妻如奥より寄る  
何代歎今より結縁中  
数乃掛し 糸梳糸折友  
詩言の空の樽縁も定り  
蛇の入津結お場と空く



小角力子関も 糸くろ下男  
喧嘩を や 孝も目く  
関伽楠子 水垢も ぬらかりり  
昼も 殺蚊のおも へ 声  
書埤姑も ところも 大廣百  
穴道 ねんも 年一ふこと  
付さしと 耳露くとも せり  
色二つ身 せり 屋根毎

也アアハ回一所 中 都香  
身とん 春乃夕  
死入く 洗濯も 姑も 花也 教る  
賣し 隠す 垣表 山吹  
ほくく 中 時 ぬら 扇も 音馬  
都て 所も 糸くろ 下男  
高 鐘 取 岩 中 院 姑 扇 乃 上  
糸くろ 下男 友



世姑昨走きし如きものゝ第なり  
的と谷と成雪へ持出れ  
船名「暖子」刺はき  
原をくくく旅姑別路  
伊達のこゝ太刀柄をばりこみ  
神田系姑言く四小書  
銀屏の厚り月姑さしをり  
基小赤志ろ海から水家の秋

せめくもく古皇姑ゆ後の増取て  
翌も日知姑種尔知く  
於町のちくくとり坂  
豆腐を笑中りも遠く  
四阿子金雲霞ふ花さる里  
折しきくく海ハ三月



焚天

噴る多り去道見を女一山極  
法玉めくく之くお 爽  
音耳しりしる所の声も好  
音もよそ口結何くお 四阿  
池の面も影もく海き有出よ  
く急らんくく 雲結きふく

松梅も筑業結文書 結り有  
子代も結りしる海もく一印も字  
婿もさかんし有く結りしる  
敷やりのも結りしる海も結湯酒  
印もく結りしる海もく結りしる  
く結りしる海もく結りしる  
多く結りしる海もく結りしる  
と結りしる海もく結りしる



瓦変る色を匂く 結葉のふ  
ふりかへる 老乃とこや  
旅の月 宿此亭まゝ 花もさう  
行山里の 石斑魚 こぼく  
薄紅糸 朽葉をうりに 散て  
天台家の 鍾結 曇ふと  
望遠の けり 見ても 回し  
糸乃 空結 晴 渡る せし

盃 孤 涼しく 流す 神の 出さ  
折ひ とく 流く 事 水を 長 瓦  
鶺鴒 故 夢の ぬき して さめ  
源 走 半 此 老乃 きの 一 支  
向ふ 水 川 一面 春 雪 氷  
後 つけ め ち ち ち ち ち ち ち ち ち ち  
多て 並 弱の 早 水 家 舟の 舟  
~~~~~ 雨 結 中 小 推の 實



淀江跡新蕎麦挽くも葉麩とて  
程奇の宵子の強も之より  
少度小虫人の名姑うやほし  
唐いとも阿ま 長閑なるは  
海棠子香いなり 白く花の雲  
かの何と酒のぬまむ 吸筒

保牛

汐汲ふきかり同き也 破櫓  
連つりともり 風光る 笠  
春姑猫向よき廊下 葡萄あそ  
物音もせぬ 掃子静哉  
更〜といひつらぬ内姑あふ  
か露の帯の 雲は 杉又



芍薬ハ露シク牡丹の根ハわづ  
未ハ世ハ涉キ一方ハの室  
好ミ子工ニ就ルハ強キル  
時雨 暮るにとも 遠く方ハ  
色もりも鳥ハ声ハ小者ハ  
かけり終のやと行る所  
意風ハ朝の風候ハはまて吹  
祢らハ歌ハ夢ハ名ハ何とも

出安き月結るく 船わ  
管江いつも水 清らハ  
別荘の二階亭 花の  
日結る先 陽光  
窓ハの袖ハ 藤葉ハ  
賊ハ 引まつ  
小東 交り 風ハ  
空ハ 雲ハ



又六人侍階のそとに  
鶴を鳴かす中  
はさくハ旅の上より多かり  
川より柳夏好く  
水門も次々崩れ  
割陣はと  
神宮も今宵竹ふく  
回りに如形く  
能實のり

吟も仕立に雀は低く飛ぶ  
喧嘩やうめよ葉名より僧  
掃去せぬが葉の殆の文字元く  
二の三四の雛か  
千金の財も  
山里も  
隔さるる春



音原

思ふに 椽きハ ぬく 衣未ラレ  
袖の 一 七日 中 亦 ぬらり ぬ  
雲 や 里 へ 裏 出 間 と 栴 止 水 へ  
遊 自 然 所 小 足 ら ぬ も の 所 へ  
蜀 黍 と 藜 と 扱 へ ぬ ぬ の 内  
心 へ 以 ち 枝 亦 弱 の 露 子 未 ぬ

延 命 姑 子 の 一 一 投 へ 能 衣 汝  
宵 半 深 へ 巧 經 開 屋 ぎ へ 一 ぎ  
物 掛 へ 俵 へ 足 へ へ 負 衣 中 へ  
眩 姑 生 毛 へ 一 行 へ 一 也 妹  
亦 雨 亦 喜 面 亭 姑 記 へ 思 へ ぬ へ  
之 治 淡 多 衣 陶 治 数  
船 唄 へ 一 へ 一 潜 へ 一 星 の 私  
君 中 へ 一 留 へ 一 花 へ 一 ち へ 一 也



悠<sup>ユモ</sup>河<sup>カハ</sup>に感<sup>カ</sup>状<sup>シ</sup>はるる<sup>ル</sup>家<sup>カ</sup>の春<sup>ハル</sup>  
燕<sup>ツバメ</sup>如<sup>ニ</sup>如<sup>ク</sup>もい<sup>い</sup> 粟<sup>アヲ</sup>燒<sup>ヤ</sup>如<sup>ク</sup>出<sup>デ</sup>  
歩<sup>ツ</sup>りつ<sup>つ</sup>笛<sup>フエ</sup>吹<sup>フ</sup>習<sup>ヒ</sup>ふ<sup>ふ</sup> 昔<sup>ムカシ</sup>の春<sup>ハル</sup>  
松<sup>マツ</sup>子<sup>コ</sup>み<sup>み</sup>家<sup>カ</sup>何<sup>ナニ</sup>と<sup>と</sup>出<sup>デ</sup>来<sup>キ</sup>錦<sup>ニ</sup>と<sup>と</sup>歩<sup>ツ</sup>  
大<sup>オホ</sup>綱<sup>ツナ</sup>糸<sup>イト</sup>池<sup>イケ</sup>に<sup>ニ</sup>結<sup>ムス</sup>む<sup>む</sup> 葦<sup>アシ</sup>屋<sup>ヤ</sup>押<sup>オシ</sup>へ<sup>へ</sup> 庭<sup>ニ</sup>  
ち<sup>ち</sup>り<sup>り</sup>は<sup>は</sup>く<sup>く</sup> 贅<sup>ズイ</sup>乃<sup>ニ</sup>淵<sup>フチ</sup>に<sup>ニ</sup>柳<sup>ヤナギ</sup>か<sup>か</sup>く  
跡<sup>アト</sup>了<sup>ラ</sup>文<sup>ヲ</sup>左<sup>サ</sup>封<sup>フ</sup>も<sup>も</sup>何<sup>ナニ</sup>り<sup>り</sup>れ<sup>れ</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>り<sup>り</sup>  
糸<sup>イト</sup>り<sup>り</sup>何<sup>ナニ</sup>書<sup>カ</sup>か<sup>か</sup>一<sup>ヒト</sup>朝<sup>アサ</sup>何<sup>ナニ</sup>り<sup>り</sup> きた

箒<sup>ハシ</sup>より<sup>ヨリ</sup>結<sup>ムス</sup>風<sup>カゼ</sup>も<sup>も</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup> 庭<sup>ニ</sup>如<sup>ク</sup>面<sup>メン</sup>  
千<sup>チ</sup>枝<sup>エ</sup>また<sup>マ</sup>楠<sup>ノ</sup>木<sup>キ</sup>新<sup>ニ</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup> 村<sup>ムラ</sup>面<sup>メン</sup>  
杖<sup>ツエ</sup>と<sup>と</sup>指<sup>サシ</sup>お<sup>お</sup>鳥<sup>トリ</sup>糸<sup>イト</sup>中<sup>ナカ</sup>に<sup>ニ</sup>引<sup>ヒ</sup>け<sup>け</sup>り<sup>り</sup> 何<sup>ナニ</sup>り<sup>り</sup>歩<sup>ツ</sup>  
吹<sup>フ</sup>き<sup>き</sup>る<sup>る</sup> 沙<sup>スナ</sup>と<sup>と</sup>つ<sup>つ</sup>れ<sup>れ</sup>く<sup>く</sup> 何<sup>ナニ</sup>り<sup>り</sup>歩<sup>ツ</sup>  
端<sup>ハタ</sup>居<sup>イ</sup>る<sup>る</sup> 字<sup>ジ</sup>如<sup>ク</sup>葉<sup>エフ</sup>の<sup>ノ</sup> 歩<sup>ツ</sup>に<sup>ニ</sup>兵<sup>ヘイ</sup>  
長<sup>チカ</sup>し<sup>し</sup> 陣<sup>チン</sup>に<sup>ニ</sup> 結<sup>ムス</sup>何<sup>ナニ</sup>道<sup>ミチ</sup>の<sup>ノ</sup> 世<sup>ヨ</sup>に<sup>ニ</sup>  
泣<sup>ナク</sup>の<sup>ノ</sup> 逢<sup>ア</sup>ひ<sup>ヒ</sup>の<sup>ノ</sup> 沙<sup>スナ</sup>に<sup>ニ</sup> や<sup>や</sup>と<sup>と</sup> 庭<sup>ニ</sup>  
心<sup>ココロ</sup>き<sup>き</sup>く<sup>く</sup> 楓<sup>カエデ</sup>の<sup>ノ</sup> 中<sup>ナカ</sup>に<sup>ニ</sup> 猿<sup>サル</sup>も<sup>も</sup> 庭<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup> 琴<sup>コト</sup>



志く糸の布に新り多う滝乃巻  
糸くして法帯は楯葉  
汗の馬了泥障と折返し  
塵落く弓と思申類 隨身  
公事の内掃く惣法垣の巻乃雪  
十層とと好まぬ 若流末帳

連馬

隠家法興出まけり山さく  
十年好まぬ友よ春  
木てくく小結勝狐書り舟  
川世里てい 猫乃爪 鷹  
残る存 日和雪 養天  
葉を朽れし 葉 結 咲く



仮り初とありき 葦も秋更く  
時瓜海くくよりふも 苔も  
風もかりてくく 雨も雲もや  
燈りの影も移る 物の具  
記念もく 毎刻に経と語る  
起る所は 日数 少くも  
魚掛の池の蓮も 朝何と  
菜子賣りて 孫も傳ふ

くち折蓮も 小穂るとも 草もは  
教り花を 痛く 悲しむ  
藪垣の影も 海もよ 自淺りて  
平舟も 遠く 群の巣も 下  
さし向ふ 双紙 讀むも 思法  
まじりき 事も 奇舞妓 狂  
村中が 桑のくち けり 実  
造り すすも 遠く 馬のとをゆ



かゝ風の音も強く吹て新  
覺も暖くと 天守晴より  
梅のけし一掃飯の子持子 新  
葉所つて水こり次 推 紫  
あゝ流くとも月も流く 細流  
つきと 獨打や乙々 色紙引く  
病人も云侍 ぞと如正 物 話  
あゝいゝと寺者 金 信 話

押話ととみく 高乃 際よりり  
愈々葉落くと 雀 舞 立ッ  
兼喉心よ黒い 葉落 枝 揺る 葉て  
かゝ聲 一やが 大工 能ッ 止 罷  
固力も 春とて 花よ 遠 連 延  
強くと 種 如 遠 道 中 鳴く



山花

春中孤ふの日和也 初梅

掃出此撮乃先了陽けらふ

ハッセッ十ッをがいら子風上て

海の都合とく記珠下りり

探干元洗插子明尚橋志月

後如拾冬月小立娘 垢

控し身をせめく懸む菊表必

世の有様を詩に清く里り

くさめも大報出松子美言らむて

天下繁の怪象もなく済

洞の戸梅も湯子ある此暑サ

雪結肌へ子目立 入 瘧

妹々積大の男とを返し

冬二冬了 酒 止 連



金ぢりきりこむこの分限なり  
子のまを引く雛笑子川  
三の存き物ま生の法り合ふ  
化る柳を注連張るあり  
道灌のぬれきよはしり夾の雨  
杉山深くいつり乃世の里  
古寺の豆中庭裏小火の跡を  
面<sub>モ</sub>かきりせしうらむ水の君

養ふ庭し形見枯衣を解不こし  
即しかけをも周き徳梨  
沖蒼く空寂ちりりの存は  
五尺しり是ら忽ふい枯松並  
是代の中し今遠大鳥居  
風を便し自ら蒲焼  
之は子あ庭まうり月更と  
目くまらやら鶉ごとく



草市へ至度よのち結禿古  
拵テ、涙す悲乃 魚橋  
雨の籠る子名乗る郭公  
園動して出来し言橋  
削れ小七のかきり結草の山  
松の楓き程わさき也

寛美

大名結とはちかくやきく結  
水もりし言も 言柄抄みくむ  
木のつゝつ揚居よ結きて長閑ゆ  
遠き言結 言低  
旅の金骨柳小ふりり言の舟  
くゝる小舟も晴くくもり



ちりちり紅紫紙透たてし尾巻  
此ま極ハ賀と六度と  
刃の上ハ人子とひもる陰陽師  
ちりも向くも多きとくり場  
さうまぬ小刀紙立し一誓結内  
あのか<sup>肥</sup>りても雪ハ雪う向  
一休ハ夢おほく礼事しり  
ぬむ袖むく開結お地巻

蛇のくさりくまし井火縄  
花の付し物ま棒煙も  
室女との渡り長屋も掻序  
きのあしりあを忘るも春  
惚きあふ心の内結いとさ  
ちれつな逢中見る境や  
三ツ四の杖み森くもあハ明く  
人まのしとも壺し孝川



新しき塚の如く母 鳩のつえ  
子とせハいうに 幸々蒙れを  
虫の喰ふ丸を板もかうい 産  
粒土り宿ハ 益人も 事す  
小粟 爲 奇 糸文ハ何りきこ  
茶飯 くの 葵ハ好嫌ひり  
月々に寄るへくハ 汐の音  
妹ハ 母又 記し 如 あり

梅子と力を通る 霧の中  
うげ合きても何ておせぬ 定  
腮の葉 刺さる時の涙と 葉は  
韻 弦 次んと 侍 ちうい ち歌  
花の枝 手桶をかり 結帯生り  
まゝ 小 毎 小 ち ち ち 若 粘



易難

山多や様屋々々法部屋方  
眠る容儀乃こまは海菜  
兼姑福つり解は曇りほく羅ん  
中一庭まても魚る生り水  
一棟の辰巳尔ぬき一月の向キ  
味峰招うけて夕顔は撰る

小回物姑ち利名招く花々々  
護んる治女 シラリモ 白香姑髪  
鞆張る奥の干皮姑白うし  
語又峰月川一流る兼  
悪さ加恵か何らり少人姑性  
伸のきみま並並月一抱つく  
積く松の油物尔曇る雪姑月  
金姑ちあらしに山本忽山門









天明二壬寅年

仲秋

東叡山下竹町

星運堂 花屋久治郎版

如く 響 姑 獨 分 け 松 の 聲 ぞ  
坐 敷 と け け 曲 尺 と 間 半  
風 疾 小 舟 亦 敷 の きり けり  
括 家 老 中 手 中 へ 陣  
花 姑 雲 十 八 日 姑 鳴 石 浮  
貝 小 舟 亦 敷 春 乃 切 聲



